

カテゴリー化の困難：サモア植民地統治における混血の役割

YAMAMOTO, Matori / 山本, 真鳥

(出版者 / Publisher)

法政大学比較経済研究所 / Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

比較経済研究所ワーキングペーパー

(巻 / Volume)

107

(開始ページ / Start Page)

31

(終了ページ / End Page)

42

(発行年 / Year)

2002-03-15

比較経済研究所小規模プロジェクト「植民地主義の再検討」
2001年第3回研究会（11月8日BT25階C会議室）
テーマ：「カテゴリー化の困難 - サモア植民地統治における混血の役割」

発表者：山本 真鳥

今日の発表は文献の3番目にある Damon Ieremia Salesa というサモア人がオークランド大学で書いた MA を下敷きにした話となる。この人自身が混血らしい。彼以前にもこのような問題に注目した人はいたが、それを中心にして歴史をおさえようとした点ですばらしい業績であるといえる。MA にしては大変な力作だが、残念ながら途中で提出期限が迫ってきたのか、時代としては第一次大戦くらいまでしか追っていない。それ以後、独立までという時代に関しても、歴史的な研究が行われる必要がある。

〔サモア諸島概観〕

サモアはニュージーランドとハワイの線上、ニュージーランドから3分の1位の地点にある。サモア諸島は19世紀終わり頃に英・米・独の間で植民地領有をめぐり争いとなり、その結果、ドイツ領の西サモアとアメリカ領の東サモアとに分かれた。西サモアには大きな島が2つあり、そこから少し外れたところにアメリカ領サモアがある。西サモアは、1900年にドイツ植民地統治が始まり、東も同年にアメリカ領として統治が始まる。西サモアはその後、第一次大戦後には国際連盟ニュージーランド委任統治領となり、1960年に独立した¹。西と東とで本来は方言もなく、文化としてもあまり差異の少ない文化であるが、異なる宗主国による植民地統治の結果として、その間には差が生じてきている。アメリカ領サモアの方が市場経済の浸透が著しい。またアメリカ合衆国国民²として、ハワイや本土に楽に行くことができる。その利点を利用しつつ、今日のアメリカ領

¹最近国名を西サモアからサモアに変更している。サモア諸島、サモア社会、サモア文化、サモア人、といったものと、国名のサモアが一致しないので、話がややこしい。ここでは、歴史研究になるので、一貫して国名（植民地も含む）として西サモアを用いる。山本は主に旧西サモアで調査しているので、そちらの話が中心となる。

² American National というカテゴリーで、American Citizen と異なる点は、大統領選挙などの連邦の政治に参加できないことである。しかし、合衆国パスポートを支給されて、合衆国本土に自由に入ることができる。

サモアが成り立っていると考えてもいいだろう。

〔 Afakasi とは何か 〕

さて、私が調査したのは西サモアなので、話もそちらに集中させよう。サモア語で *afakasi* (half caste の転訛) と呼ばれる人々がいて、これは白人とサモア人の混血のことである。サモア (旧西サモア) の首都アピアについて、資料に「19 世紀半ばにまず捕鯨船の寄航地となり、次いで帝国主義時代には西ポリネシアの環太平洋諸島を結ぶ貿易の要衝港として栄えた。今日その面影はないが、白人商人の末裔である混血サモア人が輸出入を含む商業に従事しているほか、、、」[平凡社世界大百科事典、項目：アピア] とある。サモアに白人入植者が住むようになったのは 19 世紀半ば以降のことだが、港町であるアピアに住んで貿易を営んだり、田舎の方でプランテーションを営んだりしていた。アピアは中部ポリネシアの中心的な港町で、19 世紀にこの辺には国境というものがなかったもので、中部ポリネシア一帯を回ってスクーター船で回ってコブラを集めている白人商人もいた。現在は国境で隔てられているクック諸島やニウエ島、トケラウ諸島、ワリス諸島、エリス諸島 (現ツバル) などにもスクーター船が巡回していたと思われる。彼らの多くはサモア人女性と結婚して、その混血の息子たちもやはり、商業に従事したり、プランターをしたりしていた。そのようにして、ファミリービジネスが維持されており、自給自足経済で部族的な生活をしている通常のサモア人の世界と白人世界をつなぐ役割を果たしていた。その名残はまだ残っていて、混血が繰り返されているが、周りのサモア人とはちょっと違う生活を送りながら、経済界や政府部内で活躍している。かつてはもっとサモア社会からは遊離した存在だったが、1962 年の独立後は次第に溶け込むようになってきている。

〔 接触の開始と入植者の来島 〕

まずは年表で、どのようにサモア諸島の植民地化が起こったかを見ていこう。まず、最初にサモアにやってきたのは、La Perouse というフランスの航海者で、1781 年のことだった。彼は現在のアメリカ領サモアの主島であるツツイラ島にやってきて、そのときサモア人から攻撃を受けた。他のポリネシアの島々では概ね白人の航海者たちは歓迎されているが、サモアはそうではなく、この苦い経験から以後何十年間もヨーロッパ船は近づかなかった。50 年後の 1830 年にロンドン伝道協会 (London Missionary Society) の宣教師 John Williams がタヒチよりやってくる。ロンドン伝道協会は 1790 年代にタヒチに南太平洋で最初のミッションを創ったが、そこでかなりの成功を収めた後のことだった。サモアで彼らは大首長をはじめとするサモア人たちにもものすごい歓迎を受けたという。サモ

アの改宗は大変スムーズにいった例として知られている。これら2つの公式に記録の残る接触の間に、ちゃんとした記録はないけれどもサモアに住み着くようになった難破船の乗組員や脱走した水夫がいた。南太平洋のポリネシアでは、ドロップアウトの白人が多く住み着いたが、彼らは beachcomber と呼ばれている。beachcomber の来島は、キリスト教が入って後も続いた。宣教師たちはたいてい妻を連れて来島しており、島の女性と結婚することはあまりなかった。一方で、船乗りなどは独身のまま来ているが、彼らはゲストの待遇を受け、場合によっては首長の娘などと結婚し、そこに永住してしまうことが多々あった。そのような流れ者の他にも商業やプランテーション経営を目的とする人たちがやがて来るようになる。

1856年、ドイツの植民地会社 Godeffroy & Sohn of Humburg の Unshelm がバルバライソの事務所からやってきて、翌年アピアに同社の支店を設立する。1861年、同社社員の Theodor Weber がやってきて、やがて彼はドイツ領事に任命された。出身国を異にする白人たちが多数アピアに住むようになり、そこには国際的なコミュニティが存在していた。リーダーシップをとる人々は、本国から領事などに任命されたりもしている。

白人と接触を始めた頃のサモア社会は、首長間の恒常的な小競り合いが続いていて、序列が次第にできつつあったが、しかし未だ確定していないという段階であった。サモア全土の覇権は何人かの首長の間で争われていた。白人が住み着くようになって、その小競り合いは続き、恒久平和は存在していなかった。beachcomber と呼ばれた人々の中には、そのような首長間の小競り合いに自ら参加して、新しい武器の使用法をサモア人たちに伝授する人々もいた。

〔列強の介入〕

19世紀後半になると、さらにその首長間の争いにドイツ・イギリス・アメリカが介入して来て、三つ巴になった。サモア社会内部の小競り合いは次第にその三国の代理戦争の観を呈し、やがてそれが終わるのは西サモアがドイツ領、東サモアがアメリカ領になった1899年のサモア諸島分割である。その間に Godeffroy & Sohn of Humburg が倒産して、代わりにドイツ通商農業会社 (DHPG) が活動を始めた。

これら三国のサモアに対する関心はそれぞれ異なっていた。イギリスは太平洋の覇者を目指しフィジーやNZも手中に収め、オーストラリアにも入植を開始しており、ニューギニアやソロモン諸島にも影響を及ぼしつつあった。そのような全体的な太平洋に対する影響力のなかでイギリスは当然サモアにも興味を持っていた。アメリカは、当時まだモンロー宣言が生きていて、国内フロンティアの時代であったが、徐々に触手を外に伸ばしつつある頃である。1893

年にハワイ王朝を転覆させ、1898年には併合してしまう。米西戦争の結果アメリカはフィリピンやプエルトリコを新たな領土とするが、南太平洋での影響力を高めるために、サモアを軍港として必要であると考えていた。また、開発に熱心なドイツは、ニューギニアで勢力を伸ばして、さらにサモアを植民地にしてプランテーションを作りたいという野心があった。そこで、パプアニューギニアの北半分を領有し、ビスマルク諸島、ニューアイルランド島、ソロモン諸島に影響力を及ぼしていた。そこからメラネシア人の労働者をサモアに連れてくるようになった。

〔プランテーション農業と年季契約労働者〕

南太平洋全般に当てはまるが、プランテーション開発を始めようとする、労働力が必要であるが、現地の人たちはほとんど労働に向かないという定説がある。ハワイが好例である。現地人人口は白人との接触以後激減し、サトウキビプランテーションを作るが労働力が不足、まず中国人が導入されて、次に日本人が入り、そのあとポルトガル人やフィリピン人が来島すると行った具合に、段階的に様々な移民を導入した。フィジーの場合には、同じイギリス植民地だったインドから労働者を入れた。メラネシア人労働者は当時、サモアにも来ていたが、一方でオーストラリアのクイーンズランドでもサトウキビ栽培に従事していた。

私自身は、実際には現地人が怠け者だから働かないのではないと思っている。自給自足経済の下では、外に出て一日や二日働いてお金をもらうのはいいけれど、それ以上に働くと自分や家族が食べていくイモを育てることが出来なくなってしまう。それに対して移民労働者は、現地に土地ももっていない訳だし、とにかくプランテーションで働いてお金をもらうしか生活の道がないのでよく働く。いずれにせよ、どこの地域でも現地人を労働者とするには失敗している。サモアの場合には最初にソロモン諸島人を連れてくるが、それはドイツ系の人達で免許を持っている人たちのみができることで、サモアのプランテーション経営者全員が使えたわけではなかった。

〔アピア白人コミュニティの形成と混血〕

1884年になると Apia Municipality が形成される。現在のサモアの首都である Apia も当時港町として開け、商業都市であった。そこに 383 人の非サモア人がいた。資料には白人と half caste を合わせて非サモア人と書いている。

現在 afakasi と呼ばれている人たちはどのような人々だろうか。顔だちなどから判断し、この人はヨーロッパ系の血が入っているに違いないと思える人は多いが、そのような人々がすべて afakasi で

はない。afakasi の第 1 の条件として、ヨーロッパ系のラストネームを持っていることが必要である。これに対してサモア人の名前は自分の個人名が先にきて、現在では父親の名前をラストネームにしている。その他にサモアには首長制があるが、首長の名前とされているものが継承されており、その名前をもらった人が首長になる。それは個人名とは違い、必ずしもお父さんが死んだら息子へ、とはならないが、一族のなかで称号をもつ老人の 1 人が死ぬとその名前を誰が継ぐか相談して決める。その様な人は最初に称号名がきて、次に個人名というふうにな乗る。例えば、Matuaiala という称号名をもらった Malivao という個人名を持つ人は、Matuaiala Malivao となる。その息子達は、父が称号をもらう前に生まれた場合、ラストネームに Malivao がくる場合もあるが、称号を得てから生まれた子は、Matuaiala というラストネームになる。このような名前の構造は明らかにヨーロッパ系の人たちと違う。

また、afakasi は町に住んでいることが多く、商業セクターを牛耳っている。現在サモアの Apia にある商店で純粋サモア人の経営は 1 つも無い。また、プランテーションを営んでいるのも afakasi で、ストアに卸す仕事をしている人も大勢いる。さらに、afakasi は英語を話し、町で給与をもらう生活をしている。場合によっては家でも英語で話している。逆に混血していることは見るからに明らかだが、村に住んでいてほとんど村の人たちと同じような生活をしている場合は、普通 afakasi とは呼ばない。労働者としてやってきたのはメラネシア系の他に中国系もありプランテーションで労働したが、年季が明けると町へ出て、商業を始める。メラネシア系は普通にサモア人と結婚したりして、サモア人と同じような生活をするが、中国系やメラネシア系をさして afakasi とは呼ばない。サモア人自体が、「あいつらは私達より色が黒い」と見下している場合がある。また、サモア人が宣教師となってニューギニアに行くことがあるが、そのときにもあいつらは低いという意識がある。

さて、サモアで商売をしたり、プランテーション経営をするために来た白人たちは、やがてサモア人女性と結婚することが多かった。それが、Apia に新たな社会を作っていく、先述のように 1884 年には Apia Municipality が誕生し、自治組織のようなものができた。いわゆる白人社会のなかには本国社会からのドロップアウトもいたし、必ずしも金儲けばかりしているわけではなく酒場で酒浸りになる人もいたが、出身が同じなら白人同士で助け合ったりしていた。また、なぜか現地の 2・3 人の有力首長も入っており、またサモア人妻、男女の混血を含んで Apia 社会が成り立っていた。

〔サモアの土地制度〕

サモアの土地制度とは集団的土地所有制度であり、親族集団がま

とめて土地を持っていることが普通だが、それを保証するのが称号名である。首長の名前でもって土地所有がなりたっており、代々首長が交代しても名前と土地との名目的関係は変わらない。そしてその首長が代表する親族集団に属している人は誰でも、その土地を使えるというシステムであった。

サモアでのプランテーション開発を志す白人入植者は、サモア人から土地を買おうとした。既に述べたような土地制度をもつサモアでは、土地所有者が白人の目から明らかではなかったので、土地権者とはとてもいえない人との間に売買契約を結んだり、あるいは権利者であっても二重三重に契約をしたりというケースが多々あり、国籍の異なる白人間での土地争いが国際問題となっていた。また、既に白人の土地買収は太平洋各地で行われ、ハワイやニュージーランドではそれが頂点に達していた。それら社会では、現地の人々が土地を手放したために食料生産すら事欠く例もあり、社会問題ともなっていた。1884年に列強はベルリンで話し合いをもち条約(ベルリン条約)を結んだ。これらの問題を解決すべく、これ以後の土地取引は禁止され(太平洋全域でこのルールが確認された)、さらにこれまで行われた土地売買を確認する作業が行われることとなった。土地問題委員会ができ、これまでサモア人と土地取引をした人に、登記の申請書を提出させたが、何と申請された土地の延べ面積は、サモア全土の二倍であった。タバコや缶詰にだまされて土地を売ってしまったサモア人もいたが、そうしたものをサモア人にだまし取られるケースも数多くあったのである。

そうして土地問題委員会の裁定が行われた後、実際に売買があったと認められた土地は、サモア全土の8%だけであった。この土地に関しては、売買可能地として以後も売買がなされているが、それ以外は伝統的土地所有制度が適応される土地として現在に至っている。これらの土地は今でも売買が禁止されていて、開発のためにリースをしようとしても当事者ひとりでは決定できず、親族集団が集まって話し合いをすることが必要となっている。その土地の名目的所有者である首長も、単独で決済することはできない。現在慣習地はサモア全土の80%ほどで、農業開発公社の土地を含む国有地が10%以上であり、教会等の所有地が少々あるほか、純粋な売買可能地(freehold land)は4%ほどしかない。

このような土地所有制度下で、サモア人との結婚によって関係を持つことは白人にとって大きな意味をもつ。サモア人の妻や子を介して土地をリースしたり、自分が行う開発事業を親族集団に承認してもらったりする。afakasiは母方の親族集団のメンバーでもあるから土地に対しても一定の権利を持つようになる。そういう意味で、サモアに行けばサモア人の妻をもらうことはサモア社会の中での諸権利を得ることを意味するのである。

〔ドイツ統治時代〕

再び年表に戻ろう。1898年に首長間の戦いが起き、これに列強が参入。ベルリン条約でサモア人が自らの政府をつくる権利が認められていたが、1899年に三国はこれを破棄しサモアを分割してしまう。この時イギリスはブーゲンヴィル島を除くソロモン諸島を自分のものとし、トンガを保護領とすることを条件にサモアから撤退。それで、ドイツとアメリカでサモアを分割するに至る。ドイツは経済開発を行う意図があったので土地の多い西半分を、アメリカは軍港を築造するために深い湾のあるパゴパゴ島を含む東半分をとることとなった。

では、afakasiの人々は植民地政府ができてからどのように扱われてきたのか。もともとヨーロッパ人の子孫なので、各国の国民として扱われるべきであるが、制度上の制約がある。例えば、サモアの教会で結婚しても、本国の手続きを行わないと生まれた子どもに本国の市民権は無いわけだから、その意味では、サモアに国の代表を持っているかが大きな問題であった。領事というのはそのような結婚に関する書類にサインをして本国に送るということが大きな役割であった。もちろん領事がいても、結婚や出生を登録していないケースも多々あった。また、市民権の与え方も国によって異なり、イギリスはしていて結婚許可 (license) を取って合法的結婚をしていれば認められ、結婚の事実を領事を通じて本国に送れば大丈夫であった。アメリカは、居住を重視し、アメリカに住むことが必要だったので、子どもがある段階でアメリカに渡ることが必要だった。ドイツの場合はもともと正式な結婚はあまりなく、事実婚がほとんどだった。例えば、日本時代の南洋群島 (ミクロネシア) では、日本人はほとんどが事実婚で戸籍上の届出を出していなかったが、なかにはちゃんと届出を出している人もいた。届出をしている場合、子どもにも日本人の国籍が認められ、日本人が通う学校に行くことができる一方、事実婚の場合は子どもに日本国籍が適用されず、現地の人が行く学校に行ったという。

サモアの場合、英語で授業をする小学校にサモア人は入れなかった。現在でも、Apiaには英語のみで授業を行う学校があり、サモア人は入れない規則が最近まであった。主に白人用の学校だったが、色白の half caste は、passing で入れた。1905年の白人の学校は、125人中121人まで half caste であった。いかに本国から妻を連れてきていた白人が少なかつたかがわかる。1903年に public notice を出し、認知されていない子供はちゃんと申請すれば、foreigners と同じ司法制度が受けられるとしたが、何人もそれを申請する人がいて、結局数年のうち300人余りにも上った。その人が受け入れられると、家族も受け入れられ、そのようなカテゴリーの人たちが増

えていく。しかし、このカテゴリーは市民権とは別である。1903年は、サモアの国内でも植民地政府の制度ができあがってきて foreigners という待遇になるわけだが、父親の本国の国籍を認めるというものではない。そのままの状態では無国籍ということになる。ドイツは通婚に否定的であり、1912年の通達以降、ドイツ人とサモア人の通婚はしてはいけない、またもし子供が生まれればサモア人に属する、ということになる。

〔ニュージーランド統治時代〕

その後、1914年に第一次大戦が勃発すると、ドイツの太平洋防備は手薄で、あっという間に、ドイツ領のメラネシアあたりはオーストラリアが、サモアはニュージーランドが、ミクロネシアは日本が占領した。ドイツは最小の人員で効率の良い植民地経営をしていたことで有名で、戦争当時は100人前後しかいなかった。やがて西サモアは国連の委任統治領になるが、そうになると native にお酒を飲ませておけない法律ができ、これにより half caste もお酒を飲めなくなる³。

西サモアのニュージーランド統治は1918年くらいから始まり、最初は軍政だったが、徐々に1920年から民政が開始された。ところが1908年と1926年にサモア人の不服従運動であるマウ運動が起きる。1908年は示威運動だけですぐにおさまり、首謀者を捕われてミクロネシアのサイパンに島流しにされた。しかし1926年には、デモ隊を警察が襲撃して有力首長が死ぬ事件に発展し、不服従運動として10年、やがていずれは西サモアを独立させるというニュージーランド政府の確約をとりつけるまで続いた。運動のリーダーはアピアの afakasi コミュニティや彼らと交流のある有力首長らであった。afakasi でサヴァイイ島に大きなプランテーションを所有していた Olaf Frederick Nelson は、マウ運動を扇動していると政府ににらまれ、サモアから追放となった。彼は貿易商でプランテーシ

³ アメリカ領サモアの場合は西サモアよりもっと差別が強かった。1919年には海軍士官がサモア人と結婚することを禁止する法律ができる。また、アメリカ領サモアでは、植民地政府は白人がサモア人を騙すのではないかという懐疑的な見方が支配しており、afakasi がサモア人の制度に加わることを認めない方針があった。サモア人の血が4分の3以上でないとい首長になれない法律があり、お祖父さんのうちひとりが白人であるのは許されるが、お父さんが白人なら首長にはなれないという法律であった。現在この法律は若干緩和されているが、半分以上サモア人だったらよいが、4分の3白人だと認められない、とされている。

ヨン経営者の父の仕事を受け継いでいる一方、サヴァイイ島の名家の出身である母を介して高位の称号名を襲名した首長であり、サモアの伝統的社会と西欧社会と、2つの異なる世界の仕組みを知って双方をつなぐ役割を果たしていた。追放後も彼はあきらめず、ニュージーランドに住み、*Samoa Guardian* 紙を発行して、マウの正当性を世界に問い続けたのである。サモアを追放になるという罰をあたえられており、一般的サモア人の扱いとは違っていただことがわかる。

〔独立準備〕

その後、第二次大戦をはさんで、1949年に独立準備が始まり、1954年、1960年の憲法起草委員会を通じて憲法ができあがり、1962年に独立は達成された。憲法を作成している段階において、もっとも問題となったのは、選挙制度をどうするかという問題と、もうひとつは afakasi の身分をどうするかという問題である。しかし前者の問題は結局間接的に afakasi の問題でもあったのだから、afakasi の存在はサモアの近代化の上で大きな位置をしめていただことがわかる。

まずは選挙制度について。ニュージーランド統治下で、既に選挙制度が導入されていた。これは、首長称号保持者のみに選挙権・被選挙権を与えるというもので、伝統的な地縁制度をベースとしてその中から首長の代表者を選出する方式が採用されていた。必要であれば投票を用いるが、地域の首長たちの集会において話し合いで決することが多かった。独立時には、この選挙制度を概ね採用した選挙制度をつくるというのが、サモアの代表者の考えであった。この首長にしか選挙権がない選挙を国連が民主的制度として受け入れるだろうか、ということは大きな問題であった。サモア人の論理では、首長称号保持者は世帯を代表するものであり、彼は世帯の意見を代表しているはずだった。独立時のサモア人リーダーたちは、この制度がサモア的な民主主義であるという論理を主張することにより、やがて国連の説得に成功する。

一方で、ニュージーランド統治下の選挙制度には、全く異なる白人の論理で動いている Apia Municipality を統合する形がとられていた。Apia の住人に限って、21歳以上の人々が有権者となって投票が行われ、そこから5議席の代表者が議員となっていた。つまり、実際に西サモア選挙制度は、異なる2つの制度を接合したものとなっていたのである。今や殆どが afakasi となった Apia Municipality であったが、彼らはサモアの伝統的社会システムの外側にあり、もしも、伝統的制度だけでいくと彼らは市民として代表者をもたないことになる。そこで、首長称号を持つ afakasi とその世帯員を除く全員に、individual voters の権利を与え、2議席（人

口比から計算してふさわしいとされた)の代表者を選出することとなった。

もうひとつの afakasi の身分をどう扱うかの問題について。それまで afakasi は、統計上も混血サモア人 (part-Samoan) というカテゴリーにくくられていたが、外国人という法制上の扱いであり、無国籍者もいたし、また父や祖父の国の市民権を持っている人々もいた。しかし、そうした特別扱いはできるだけさけるという方針が定まり、特別な市民権を与えたり、二重国籍を認めたりする代わりに、西サモア国籍を取得することが期待された。他国籍のままサモアに居住することも二重国籍をとることも禁ぜられたのである。よその国の国籍をもつ afakasi には、西サモア国籍との間で選択を行わせ、前者を選んだ場合、市民としての居住はできないこととなった。これが決まると、それまでの西サモアで享受していた生活をそのまま営むことはできないのではないかという不安から、財産を海外に移転して出国していく afakasi もいた。

さらにこの制度は、人口調査の中での別なカテゴリーの外国人とその子孫にも適応された。それは、プランテーション開発のために連れてこられたメラネシア人や中国人の年季契約労働者とその子孫の問題であった。人口統計上、1世に関してはメラネシア人、中国人というカテゴリーになっているが、子孫はサモア人のカテゴリーにいれられていたと思われる。これらの1世たちは殆どサモア人の配偶者をもち、afakasi に比べるとずっとサモア人社会に入り込んだ存在となっていたが、彼らにもこの市民権のルールが適用され、individual voters の権利も行使できるようになった。彼らは、植民地政府のもとでは、サモア人よりも低い階層にいれられていたのであるが、この問題も一挙に解消されることとなった。

〔終わりに〕

憲法を制定するときに、この2つの方針を貫いたことは正解で、結局大局的にみて西サモア国民を作り出すことに成功したといえるのではなからうか。それまで遊離していたかに見えた afakasi は、独立後はもう一つの遺産であるサモア人としての出自により関心をもち、サモア人として生きることにごだわりを見せるようになった。多くの afakasi が individual voters としての権利を放棄して首長称号を取得し、なかにはそれぞれの選挙区で選ばれた国会議員となる者もいた。首長称号をもつ人々はサモア文化の神髄ともいえるサモア語の演説の仕方を学ばなくてはならない。首長称号保持者は、サモア文化の伝承の守護者となるのである。独立当時、サモア語をばなすことの不得意な afakasi は大勢いたが、今では国会で individual voters 選出議員でも英語で演説することはない。

《質問》

afakasi であることを強調するために、どのようなヨーロッパ文化が使われるのか？それぞれ出身地による違いはあるのか？

《答え》

家や仲間内で文化的にはあんまりヨーロッパ的なものを強調したりすることはない。むしろ、サモア的なものへの関心はある。ヨーロッパ人と言ってもいろんな国からやってきているし、ヨーロッパ人（白人）のアイデンティティは曖昧模糊としている。例えばヨーロッパの音楽を聴いていればヨーロッパ人なのかと言えばそうでもないし。白人の文化はグローバル化のなかで、スタンダードになっているからそれを特有のものとして、自分達の印みたいに使おうというアイデアはたぶんあまりない。むしろ、サモアの文化を彼らは割と熱心に取り入れていると思う。ヨーロッパ人との混血だと言っても、ヨーロッパの親戚とどれくらい交流があるかと言えば、サモアに来て何世代も経っていたりすると、ほとんどない。ルーツ探しの結果交流が復活しても、もう戻ることは考えられない。もうサモアに居るしかなというところもある。

《質問》

サモア語はサモアの教育の中でどの位使われているのか？

《答え》

人口 16 万だから、サモア語だけで高等教育までやろうとするのは、かなり難しい。サモア語で教科書を書くことも大変なことだから。中等教育になるとほとんど英語でやっているが、サモア語（国語）のカリキュラムは、独立後にかなり整備されてきた。サモア語ばかりでなく、サモアの習慣（演説、儀礼のプロトコール、芸能など）を教えている。初等教育は、例えばサモア語の数学の教科書があるかといえばそれは疑わしいが、少なくとも先生はサモア語で教えている。

《質問》

half caste の女性はどのような結婚をしていたのか？

《答え》

half caste 同士が結婚することもあるし、あるいは白人の男性と結婚するのが、普通の half caste の女性の人生だったが、最近はサモア人と結婚することもある。

植民地統治時代は、白人と結婚することが普通だった。half caste の女性はある程度英語が通じるなど、ある意味でサモア人より白人にとっては近づきやすい存在だった。また、サモアでは half caste の売春婦が多かった。

ある女性のケースを Meleisea があげている。half caste の女性だったが、サモアの結構身分の高い人と恋に落ちて駆け落ちし、相手はやはりいろいろあって結婚できないが、赤ちゃんが生まれ、それを夫方にあげてしまった。しかしその後、白人も half caste も誰も結婚してくれない。結局サモア人と結婚して、子供が生まれたりしたが、自分の実家の兄弟たちは half caste や白人と結婚したので、ほとんど没交渉となってしまったという。そのように、身分社会のように階層化していたので、家族がその間に引き裂かれてしまったのである。

ただ、half caste の女性の中には、すごく起業精神に富んで成功を収めた人がいる。19世紀にサモアで育ちアメリカに留学し帰って来たエマ・コーは、後に白人と結婚して、結局結婚生活は上手くいかなかったが、その後一族を連れてニューブリテン島に渡り、大きなプランテーション開発に従事して大金持ちになっている。後にクイン・エマと呼ばれた。もう1人は『楽園へ帰れ』の登場人物ブラッディ・マリーのモデルとして良く知られているアギー・グレイである。戦時中にアメリカ人相手にハンバーガーを売って、大もうけし、それを元手にアギー・グレイ・ホテルを作って、今ではサモアの二大ホテルの1つとなっている。いずれも白人と結婚しているが、必ずしも人生に成功したとはいえないような夫とは離別し、成功を収めている。

サモア人はちょっとお金持ちになると、周りの人がたかりに来て、お金をあげなくてはならず、お金をもったらみんなにわけるのが原則である。まわりにお金を取られても大丈夫なくらい儲けないといけないので、サモアで金持ちになることは大変である。half caste は商売のノウハウを Family でもっており商売上手で知られる。サモアでは「貸して」が多くて商売をしているとこれに悩まされるが、ある half caste の起業家の女性に「貸してと言われて断れますか」と聞くと「簡単ですよ」と言っていた。half caste であることで、サモア人も「貸してくれない」ことに納得するようなところがある。やはり、half caste なしではサモアの商業は成り立たなかったから、サモア社会の発展にも立派に貢献してきたといえるだろう。